

「語り」を意味づける意識化された〈私〉と 意識化されない〈私〉

— 「不登校」事例の検討を通して意味生成の多様性を探る—

山本 智子*

Describe about what 〈I〉 as a Conscious Listener and
〈I〉 as an Unconscious Listener:
by Narrative with Particular Reference to School Phobic Child
(YAMAMOTO Tomoko)

はじめに

私は、週に一度、ある福祉施設を訪れている。訪問の目的は施設のスーパーバイザー的役割を果たすことと、知的に障害をもつ利用者さんとその家族、職員さんたちへの心理的援助（面接）をおこなうことである。

ふつう、面接といえば二者間のカウンセリングを想像するかもしれないが、私が訪れる施設では早急に対応する必要がある相談内容については利用者さんの日常生活の様子をよく把握している担当職員との三者面談をとることが少なくない。その場ですぐに対応できる策を探ることが求められるからである。はじめの頃はこの形式に少々戸惑ったが、後に、利用者さんが語る「語り（ナラティヴ）」の解釈に私とは異なる視点が入ることによって、それぞれが解釈した意味をすり合わせ、より適切な支援の選択につながると感じるようになった。しかし、ときにこの解釈がなかなかすり合わないことも生じてきた。

ひとつ例をあげると、最近入所されたある利用者さんの「怖い」という言葉に対して、私はそこに「落ち着いた生活環境を望んでおられる」と解釈し、職員は「施設は落ち着いているとはいえないかもしれないが、むしろここに来るまでの生活、あるいはご家族との関係が怖かったということ表現しているのではないか」と解釈したことがある。利用者さんの成育歴や現在置かれている状況、状態については共通に認識しているにも関わらず、この「怖い」という言葉に対する解釈が異なることに関心をもった。当時の私がこの違いについて感じたことは

* 近畿大学教職教育部講師

「ときにパニックを起こした利用者さんによる突然の、大きな声や音（施設という場に慣れていない人にとっては、「怖くない」とはいえないような）に囲まれて入所生活をしている『今』に私は焦点を当てたのだろう。そして、職員さんは施設の日常に慣れているため、大きな声や音を怖いとは感じず、ご家族との『過去』に焦点を当てたのだろう」ということであった。つまり、利用者さんが語る「怖い」という言葉を、私と職員さんの異なる生活史を背景に、異なる役割や視点で聴いた結果、異なる解釈を生んだと考えたのである。

カウンセリングや教育相談などの特別な場だけではなく、人が他者と対話をしながら生活を営む存在であるかぎり、こうしたことは常に生じている可能性がある。日常生活の中でも、意識的/無意識的に他者の「言葉」を解釈しながら自分の「言葉」を選択している。また自分の「言葉」も解釈され、他者の「言葉」が選択される。このシークエンスが「対話」というものである。こうしたシークエンスの中で、私たちが「彼は/彼女はこういっている」と確信し受け取っているその意味が、本当に「彼が/彼女がいったこと」を表しているのかどうか。その点に常に注意を払いながら、他者の「語り」を聴かなければならないのだが、それはなかなか難しい。それぞれが生きている世界の中から生じてきた自分たちの解釈が「正しい」と思っているからである。そして、「正しい」と思うことで他者の「語り」がもつ多様な意味を見落としていく可能性に気づかなくなるのである。

確かに、「語り（ナラティブ）」研究の中には、語り手が多様な視点から多様な物語を構成する「羅生門的現実」という言葉がある（高井・中西 2009）。しかし、これは「語り手」の視点に焦点を当てたもので、「聴き手」の視点が「語り手」と同様に、聴いた「物語」を聴き手の視点から理解し、その理解に引き寄せながら物語を構成していく可能性については、明確に触れられていない。

こうした問題意識をもちながら、本稿では、「語り」を意味づける意識化された聴き手を〈私〉と呼び、「語り」にそれ以外の意味を見いだせなかった聴き手を〈私'〉と呼びたい。〈私〉と〈私'〉は一見まったく異なる立場にいるように捉えられるかもしれないが、〈私'〉に気づくのもまた〈私〉なのである。本稿では、この〈私〉が〈私'〉に気づいていくプロセスを検証するために、「不登校」に対する面談事例を用いて考えていきたい。

1. 「語り（ナラティブ）」とは

まず、本稿の中心をなす方法論である「語り（ナラティブ）」とは何かについて述べたい。「語

り（ナラティブ）」とは、無秩序から協働して「意味」を生成するプロセスである。さらに、「語り（ナラティブ）」の中で私たちが「現実」と捉え語るものは、もともと「事実」や「真実」として実在しているものではなく、その人が生きる社会や状況の文脈においてそのつど構成されているものであり、自分もつ認識の枠組みや知識を用いて世界を理解し、自分なりの「意味」を生成すると考えられている（Berger & Luckmann 1966=1977、Kleinman A. 1989=1996）。そして、その「意味」は、聴き手との相互の交流を通して、社会的に構成され、立ち現われてくるものだと捉えられている（野口 2005）。

したがって、対話の中で語られる「現実」はあくまで「構成された現実」であり、個人がもつ何らかの「真実」の反映とは考えない。我々が着目するのは、個人が語る「語り（ナラティブ）」がどのような「現実」を構成するかである。仮に、何らかの「語り（ナラティブ）」を詳細に分類したり分析したりすることがあったとしても、それは、そこで構成される「現実」を理解するためであって、背後に隠された「真実」を発見するためではない（野口 2005：224）。つまり、語り手が生きる「現実」は相互の交流を通して社会的に構成されるものであり、人々の思いや他者との交流とは別のところに「現実」が存在されるわけではなく、人々の共同作業を通してのみ「現実」が立ち現われてくるものなのだ（野口 2005）。

したがって、「語り（ナラティブ）」の性質には、我々がもつ観念、感情、家庭や職場での対人関係を形作る密接な結び付き、さらには広く共有されているイメージ、経済力、ケアや福祉の社会的機構などと結びついた我々の時代や生活を構成しているあらゆる特徴と、分かちがたく結びついているものである。

例えば、「病いの語り」で著名な医療人類学者である Kleinman は、患者が語る物語を、「文化的表象」、「集合的経験」、「個人的経験」からなる「三点測量」モデルにおいて「多義的ないし多声的」に捉えることを提唱した（1989=1996：9）。ここでいう「文化的表象」とはその時代、その場所において広まっているイメージであり、「集合的経験」とは、苦難を耐え忍んでいく社会で共有された行動のスタイルやパターンのことを指し、「個人的経験」とは、個人が経験する個性記述的な経験のことである。そして、この「個人的経験」が生物医学によって「病いとケアの中心的要素」だと思込まされているものであるのだが、Kleinman は、この「個人的経験」がいかに集合的経験や文化的表象との相互作用によって形づけられるか、が見落とされがちであると指摘している。

いわゆる、「病いの経験」とは、病気それ自体がもたらす身体的苦痛や不自由さのみならず、

日常生活をスムーズに送れない辛さ、会社や家族の中での役割を果たせない辛さ、あるいは経済的困窮、人生全般への不安など、さまざまな辛さの入り混じった経験のことである (星野 2006 : 76)。つまり、「個人的経験」は、個人的・主観的な経験である一方、社会関係と不可分に結びついたものだといえる。そのため、教育相談をはじめとする「相談の場」などにおける「語り (ナラティブ)」の研究は、語られる内容が単に「個人的経験」であると捉えるのではなく、家族やネットワークの中の個人間のあいだで経験されるものであり、さらに文化的イメージや行動の集合的パターンを反映するものであるということをはっきりと示さなければならない。言い換えると、「人々が何を体験しているのか」についての理解には、心理的・医学的理解のさらに奥にある「身体と社会の相互作用 (sociosomatics)」や、「社会的苦悩 (social suffering)」という社会的・文化的・政治的文脈に及ぶ厚い記述が必要になるということである (辻内 2006 : 132)。

同様に、こうした個人的経験を語る「語り」は、その人が生きている生活の場で置かれている“position”によって異なる、と提唱する研究もある (Harre, R & van Langenhove, L 1999)。Harre, R & van Langenhove, L が用いる“positioning”という言葉は、人が「語る」とき、個人の内的思考過程において自分がおかれている「立場 (position)」の確認と、その立場に対する社会的基準・価値観・規範に影響を受けた「社会的な力 (social force)」の参照が行われ、その結果、どういう言説を生むことが最も適しているかという筋 (story line) を判断し、それらの三点から一貫性を持つように語る (speech-acts) ことを意味する (Harre, R & van Langenhove, L 1999 : 18)。そのため、個人の語りに現れた positioning には、その個人がどのような社会的条件の下に置かれているのか、自分にどのような立場を付与し、意識された「自己の立場」に一貫性を持たせて語るのか、そして、その「語られたもの」がどのような社会的現実を作り上げるのか、といった個人が語る「語り (ナラティブ)」の背景を検証できると考えられている。つまり、「対話」がいかにか、その人の内面にある思想や「社会から受けている力 (social force)」を音声化するか、また、その内面の思想が音声化される時、その人が生きる社会がもつ力がその人自身の「自己形成」にいかなる影響を与えているのか、である。従って、個人の語りの中には様々な要因によって影響を受けた「語るポジション」が存在するとし、どのポジションを用いて語るかは、語る個人が置かれた社会的状況によって異なることを明らかにした。

いずれにしても、人は「唯一、絶対なる正しい物語」を有しているわけではなく、複数の物語

を内在化し、「聴き手」や場面に応じて何が一番適切であるのかを選択して語るといえる（山本 2008a）。こう考えると、「聴き手」もまた自分自身の中に内在化された複数の物語をすべて意識化し「聴いている」とはいえず、本稿で検討したいのはこの意識化していない「聴き手」の存在である。

2. 「語り（ナラティブ）」に意味を付与するプロセスと聴き手—先行研究から

2-1. 「語り（ナラティブ）」に意味を付与するとはどういうことか。

人々は、心身の異常や不調をさまざまなものごとと関連付け、意味づけ「語る」。そして、この「物語化」という行為それ自体が、当事者たちの行動や社会的やり取りを方向づけ、その支援に影響することが見てとれると言われている（星野 2006：70）。この「物語化」におけるプロセスは、さまざまな物事や出来事が一定の文脈の中で関連付けられ、意味の連鎖が作り出されていくものである。ゆえに、「人々の語り（ナラティブ）」に注目することは、何がどのような文脈において、なぜそのように関連付けられて「彼ら/彼女らの物語」を構成するのかについて着目することを可能にする。つまり、人々が語る「意味」とは、多くの個々の出来事を単に加え合わせたものではなく、個々の出来事との相互関係によって生じたものであるからだ（Kleinman 1989=1996：10）。このように、人が「語る」という行為は社会的な構成作業と対話を通して作り出される現実の中で営まれ、他者とともに作り上げた物語的な現実により、自らの経験に意味とまとまりを与える。そして、与えられた現実を通して自らの人生を理解し生きるといえる（Anderson 1997=2001）。

家族療法で著名な Anderson と Goolishian の物語論的立場は、以下のような「前提」に立っている（McNamee & Kenneth J. Gergen 1992=1997：63-65）。(1)人が関与するシステムは言葉を作り出し、同時に「意味」を作り出す。つまり、社会組織は人と人とのコミュニケーションの産物であり、人が関わるシステムのすべては言語的なシステムであり、従って治療的システムとはこのような言語的システムのことである。(2)意味と理解は人びとの間で構成される。(3)いかなる治療システムも、ある「問題」をめぐる対話によって結びついたものであり、問題を編成し、問題を解決しないシステムである。(4)セラピーとは、治療的会話の中で起こる言語的な出来事である。治療的会話は相互の交流の中で、アイデアの交換を通じて今までとは異なる新しい意味を発展させ、問題を解決せずに解消するシステムである。(5)セラピストは治療的会話の参与観察者であり参与促進者である。(6)セラピストはマニュアル的な質問や特定の回答

を求める質問ではなく、「無知」の姿勢で質問するという専門性を発揮する。(7)セラピーで扱われる問題は、我々の主体性や自由の感覚を損なうようなやり方で表現された物語であり、それゆえ、問題は言葉の中に宿り、その意味が引き出されてくる物語の文脈に固有のものである。(8)セラピーにおける変化とは、新しい物語を対話によって創造することである。

Anderson は、こうした面接者の態度の中でも特に重要なものとして「無知の姿勢 (not-knowing)」をあげている。この「無知の姿勢」とは、セラピストの純粋な好奇心がその振舞いから伝わるような態度であり、クライアント、問題、変化すべきものについての前もって用意された意見や期待を表すものではない。面接者の過去の経験や理論的枠組みに導かれた真理や知識に制約されることなく、クライアントとの会話を通じて、「問題」に対する理解や発見を共同で探索していく姿勢のことだ。こうしたクライアントから「教えてもらう者」としての姿勢が、場に居合わせる人々との間で「意味のある対話」を導き、新たな可能性を生み出すものであるという。つまり、聴き手の関与が常に語り手の「語り (ナラティブ)」に影響を与えていくことになる。

2-2. 「語り (ナラティブ)」の聴き手

他者の「語り (ナラティブ)」を聴く聴き手は、常に自分の経験に基づくある一定の枠組みや理論をもっていることを、自覚しなければならない。そのため、Anderson がいうように、面接の場においては、自分自身がどのような過去の経験や理論的枠組み、変化すべきものについての前提や期待に制約されることなく、「問題」に対する理解や発見を共同で探索していく姿勢を保つことが重要である。語り手の「語り (ナラティブ)」の意味を読み取る対話には、語り手だけではなく、聴き手自身の生きている背景が大きく影響するからである。

語り手はしばしば我々の社会的な尺度やイデオロギーを具現化する「ドミナント・ストーリー」を語る。しかし、聴き手との対話の中で、それら「ドミナント・ストーリー」から離脱することがある。なぜならば、異なる背景をもつ聴き手が、語り手が気づかない〈語り手〉を照らしていくことがあるからである。そして、この離脱した物語こそが「ドミナント・ストーリー」では説明できない個性記述的な「語り (ナラティブ)」だということができるだろう。野口 (2002: 80-83) は、「物語る」という実践の中で人の語りは一定の認識や世間一般の言説に基づいた枠組みに依拠して語る「ドミナント・ストーリー」に支配されながらも、その一方で、語り手たちの「生きられた経験」とのずれを内包する「オルタナティブ・ストーリー」を語る

という両義性を有するものだと指摘している。

この「ずれ」にアプローチしていくことが、聴き手の関与といわれるものである。つまり、人は語るという行為の中で、常に出来事を完全に表象しているわけではなく文化・歴史的に相対的で典型的な「ドミナント・ストーリー」を語ることもある。しかし、それでは説明できない固有の物語である「オルタナティブ・ストーリー」は聴き手の関与の結果、現れると考えられる。なぜならば、人の語り（ナラティブ）の意味は唯一絶対的なものではなく、他者との相互行為においてたえず解釈され再解釈され変容していく側面をもつものであるからだ。

つまり、人の「語り（ナラティブ）」は「語り手—聴き手」との相互行為の中で、常に流動的であり、唯一正しい物語と言えるものはない。「語り（ナラティブ）」を規定している「聴き手—語り手」の関係性はその場で語られた「語り（ナラティブ）の意味」の構成に大きな影響を与える。森岡（2008：229）は「ある語り手によって物語の意味が構成される時その意味の構成には『聴き手』という他者の働きが組み込まれている」と指摘している。つまり、人の「語り」は流動的なものであり、それを流動的にするものは、「語り手—聴き手」の「関係性のあり方」そのものであり、この両者の「関係性」が、個人が語る「語り（ナラティブ）の意味」を規定していくものであるともいえる。次章では、他者の「語り（ナラティブ）」の意味生成に重要な役割を果たすと考えられる「聴き手」が、語りの場において何を考え、何をしているのかについて述べてみたい。

3. 他者の話を聴く〈私〉

「語り（ナラティブ）」を扱う場合、語り手と聞き手間の関係性をどう記述するかが重要である。たとえば、語り手が誰に向かって、あるいはどのような状態の人に向かって語るかでは語り方も語る内容も異なる。従って、「語り（ナラティブ）」は常に流動的であり、唯一正しい語りがあるわけではない。そのため、聴き手は誰に向かって、どのような状況で、どういう聴き方をした時に、どのような話が語られたか、という観点からみることが重要だと言われている（斎藤・岸本 2003：95、畑中 2010他）。つまり、一回限りの「生の語り」に接近するというナラティブ・アプローチにおいては、語り手と聞き手間の関係性が協働で生成する「語り（ナラティブ）」に、どのような影響を与えているのかを記述することが重要なのだ。

〈私〉が「語られる場面に参加している」場合、単に相手の「語り（ナラティブ）」に耳を傾けているだけではない。語り手の「語り」を聴き手の体験、価値体系や規範に引き寄せようと

する意思をもった試み（「語り」の方向付け）が行われている。さらに、語り手の「語り」を通して、聴き手に新しい物語りの創造（取り込みと新たな視点の獲得）や、語り手の「語り」に対する否定的感情の喚起、あるいは無視（聴き流し）、語り手の「語り」に巻き込まれる、あるいは語り手の「語り」に聴き手を巻き込む（聴き手のペースに巻き込む）などの、「行為」が「聴く」という作業の中で同時に行われていると考えられる。そのため、こうした態度をもつ「聴き手の応答」が、語り手の「語り（ナラティブ）」を変容させる可能性をもつのである。

たとえば、異なる「聴き手」や、場の違いによって得られたデータ間には矛盾が存在するという事も生じるであろうし、反面その矛盾が矛盾としてひとつの重要なデータとして分析される可能性を拓くものともなる。そのため、「語り（ナラティブ）」を分析する場合、相対化された聴き手としての〈私〉の記述が「語り（ナラティブ）」分析には不可欠なものと考えられる。通常、「語り—語られる」関係は「入れ子」状態になるはずだが、ここでは「語り手」と「聴き手」の関係を「生成された意味」を中心にして図1に示した。ここには〈私〉はまだあらわれてこない。

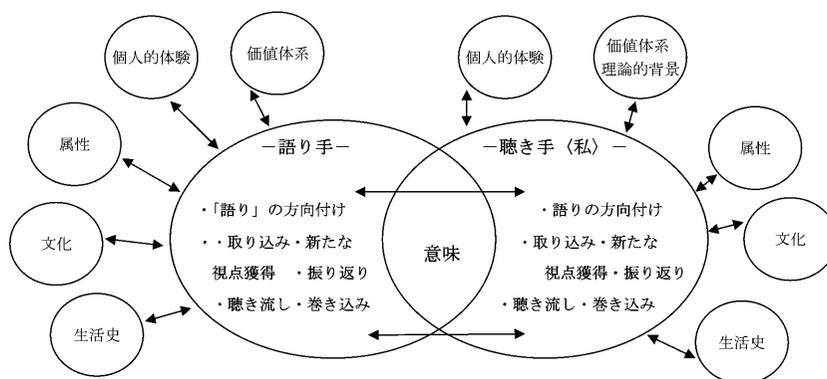


図1 意味を中心においた「語り（ナラティブ）」の場面における聴き手〈私〉と語り手の関係性

こうした観点から考えると、語り手と聴き手が共に生成する「語り（ナラティブ）」の意味は、「語り手」と「聴き手」によるそれぞれの側の内的な枠組みが、その生成に影響を与えているものだ。例えば、「語り（ナラティブ）」を生成する場面においても、「聴き手—語り手」はそれぞれのもつ体験や、価値体系、属性や文化、生活史などを背景に、「語り（ナラティブ）」の意味を作り上げていく。つまり、聴き手である〈私〉のもつ体験、価値体系、属性や文化、

生活史、さらには、聴き取りの場所、語り手との関係、語り手へのイメージ、その他の条件がそこで生成された「語り（ナラティブ）の意味」を解釈することに影響すると考えても良い。従って、「こうではないか」と聴き手が解釈した意味が、それが生じた場所や聴き手の違いによって多彩な色合いを帯び、一見矛盾するとみえることさえあるのだ。

ナラティブ研究が目指すものが、語り手の語る「意味」を分析するものであるならば、語られた背景にある人と人との出会いや、出会いによって生じた「意味」と、生じなかった「意味」のそれぞれを分析する必要があるだろう。つまり、語り手と共に生成した「語り（ナラティブ）」の意味には、自分自身もつ価値体系や規範、過去の臨床経験、成育歴など、多様な要素から構成していることを意識している〈私〉の関与と、意味を見落としている意識化されないまま「語り（ナラティブ）」の場へ参加する〈私〉を記述することが、「語り（ナラティブ）」の意味をより充実させることにつながると考えられる。

この〈私〉と〈私〉の関係を簡単に図式化したものが図2、である。図に少し説明を加えると、語り手によって語られた「語り」に意味づけている（語りの意味を共有している）のは聴き手である〈私〉であり、語り手の「語り」と交わらない（意味を共有できない・意味に気づかない）位置にいるものが聴き手である〈私〉である。

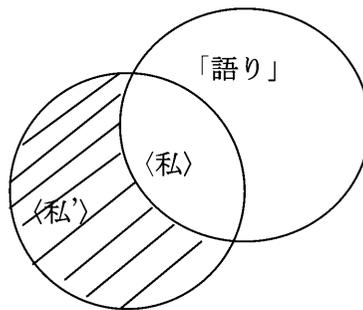


図2 〈私〉と〈私〉の関係

次章からは、「不登校」に関する相談事例を通して、〈私〉が〈私〉に気づいていくプロセスについて述べてたい。

4. ある不登校児の「語り」を通して

ここでは、200x年y月から200x+1年z月まで、約15回にわたり行ったある不登校児に対する心理的援助の内容を紹介する。私は発達障害をもつ児童・生徒およびその家族に対して面接調査を行っている。ここではその中から、面接協力者の母親から調査とは別に依頼された兄弟の不登校に関する面接事例をあげる。

発達障害児(自閉症)を弟にもつ美雄君(男児 当時 中学3年生)は、中学2年生1学期の半ばから学校にいけなくなった。理由はそのときどきで異なり、母親からは「どうしてよいのか分からない。一度話を聴いてやってほしい」という訴えがあった。本人も面接を希望しているということから、面接の場を用意することになった。私は、基本的には相談が持ち込まれると、『今』の問題に焦点を当て、具体的に対応していくという立場をとっている。特に子どもたちに関する相談の場合、早急に対応することが求められることも少なくないため、なるべく、「今、具体的にどうすれば子どもたちにとって一番良いのか」を中心に面談を行おうとしている。その中で美雄君の面談が始まったのだ。

母親がもともと面接協力者という関係もあり美雄君との面談は母親を含めて3者で行なわれた。期間は1年2カ月である。その中で、美雄君は様々なことを語った。部活動のこと、塾での勉強のこと、進学への不安、自分の性格の弱さ、不登校の理由、弟のこと、母親のこと、家族のこと、いじめのこと、今関心がある遊び、好きなテレビ番組、好きなスポーツなど、その内容は多岐に渡った。そして、この1年2カ月の中で美雄君はいろんな話をし、学校に戻っていき面接は終了した。この間、美雄君が困っている問題には具体的に働きかけてきたが、三者面談の形式をとっていたので母親からもいろいろな話を聴いた。面接終了時には美雄君の語りは大きく変化していったが、母親の語りは「不登校の理由は、障害をもつ弟のためにかけた精神的負担が原因だったのだ。お母さんのせいだ」というところから徐々に距離を置くようになってきたものの完全に離れることは難しかった。その点について最初は反抗していた美雄君も最終的には諦めたように思えた。余談になるが、母親は不登校が解決した今でも「弟のために苦勞をかけたね、学校に行けなくなってしまって申し訳なかった」と振り返り語る。その母親の語りを聴きながら中学の頃には反論していた美雄君も大学を卒業した今「ぼくは本当に気にしてないから、お母さんもあんまり気にせんといて」と母親を気遣うようにもなった。

さて、再び当時の美雄君の話に戻すが、一般的な理論から考えると、子どもの「不登校」にはいろいろなタイプがある。しかし、臨床的には、「不登校」を「これ」というタイプにすっ

きりと分けることは難しい。様々なタイプが複合的に絡み合い、「不登校」が起こっていると考えるのが妥当な事例も少なくない。従って、美雄君の「不登校」の理由にも、さまざまな要因が複合的に絡み合った結果として生じていると解釈するべきであるが、私はこの面接をまとめるにあたり、「美雄君の語り（ナラティブ）」ではなく、「母親の語り（ナラティブ）」を拾い上げていた。なぜならば、私は美雄君の「不登校」に働きかけるためには、母親が考えているように障害をもつ弟の存在というよりも、そのことで母親が抱えている「自責の念」が美雄君の精神的な負担になっていると考え、その軽減に焦点を当てるのが妥当だと考えたからである。ここでは、私が拾い上げた「語り（ナラティブ）」をいくつか取り上げ、なぜそれを選択したのかについて考えていきたい。

（場面1 母親の語り）

面接の中で、私は美雄君の小学校時代から美雄君がどのように学校生活を送ってきたのかについて話を聴いた。「小学校のときはわりかし楽しくやってきたと思う。でも……、今もそうやけど、昔もいろんなことがあって、……けど、それは自分で乗り越えてきた」、と語った。その美雄君の言葉をもとに始まったのが、以下の対話である。

母親：……ちっともそんなこと言わへんからわからんやんか。言うたら良かったのに。
美雄：いや、別に。気にしてないし。ちょっと言うただけやから。
私：自分で解決してきたんやね。つらいときもあったやろうけど、乗り越えてきたんや。
美雄：はい。今から思うと、「別に」という感じです。
母親：それやったら良いけど…。なんか、水臭いような気がして、なんで言ってくれへんかったんかて。弟とあんたは別やんか。二人とも子どもなんやし。あんたがしんどいときにはお母さん、力になってたよ。……今、学校に行かへんのは……そういうこと？
美雄：関係ない。
私：（母親に）そういうこと？とは、お母さんはどう思われたんでしょうか？
母親：いや、弟にばかりかまってた私が（不登校の）原因かって。
美雄：だから、それは関係ないっていうてるやろ。
私：（不登校には）いろんなことがいっぱいあってのことだろうから、お母さんだけが原因ってことでは……ないような気がします……よね。
母親：でも、私にはそう聴こえる。
私：どうして、そう聴こえるんでしょう？
母親：障碍の親の会で、ずっと言われてきた。兄弟が寂しい思いするから、余計にかまってやらんとあかんて。なのに、どうしても、弟に手がかかるから、お兄ちゃんをほったらかして、こうなったて。だから、私がおもったかまってやってたら、同じようにかまって、話ももっと聴いてやってたら、こんなことにはならんかったんかなあて。今さら、なんば後悔してもどうにもならんことやけど、本当にこの子に（美雄君に）申し訳ない思いがする。
美雄：……………

私 : お母さんも精いっぱいやってこられたんやから。美雄君もかえって辛いかも。今は、「なんで学校に行かないのか」の具体的な理由とそれをどうやったら「学校に行けるようになるか」という方法を考えませんか。

母親 : でも、根本にそれがあつたら、どうしようもないような気がするんですけど。

ここで私は、障害児を兄弟にもつ子どもの心理的背景を参照にした。確かに、障害児の兄弟をもつ子どもに「不適応行動」、「不適応症状」がでる頻度が高いと指摘する研究は少なくない(広川 2003他)。美雄君の母親が言うように、親が障害をもつ子どもの養育に時間や労力を取られ、兄弟は「親は自分をかまってくれない」、「私も/僕も同じ子どもなのに」などの不安や不満をもつこともあるといわれている。自閉症や精神障害をもつ兄弟の行動に困っているその不安や不満が精神的な負荷となり、自己を確立していく思春期・青年期になって現れてくるということがあつるともいわれている。しかし、その半面、兄弟が障害をもっているが故に、他者に対する共感性が高く、困難に対してひるまず挑戦していく人に育つと指摘されることもある(広川 2003)。そのため、「障害児の兄弟としての育ちが今の不登校という現象につながっている」と母親が解釈していることを深く受け止めはしたが、〈私〉が対話に現れる母親の言葉に何か違和感を覚えたことは否めない。この違和感が後に〈私〉の存在を生じさせたのかもしれない。母親はまた、不登校の理由についてこう語っている。

〈場面2 不登校の理由について〉

私 : いつ頃から(学校に)行けなくなったの?

美雄 : 中2になってからしばらくして。

私 : 何か、理由があつた?

美雄 : しつこくからんでくるグループがあつて、こっちも最初は笑つて相手してるんやけど、だんだん嫌になつてきて。「やめろや」ていうのも相手が喜ぶんじゃないかと思うとなんか…、プライドとかあつて言えないし、だんだん疲れてきた。

母親 : 前に言つた子ら? 弟のことで、なんか言われるん?

美雄 : いいや。小学校の時にはからかわれたことがあつたけど、今は普通のこと。ただ、相手は複数やし、同じクラスにおつて無視するわけにはいかんわな。そいつらに会うのがうとうつというか、もう相手にするんも嫌で。

私 : じゃあ、その子らがいるから学校には行きたくないと

母親 : ○○君(弟)の事、言われてるわけじゃないねんな。そしたら、そんなん、無視するとかで乗り越えたら良いんとちゃうの? 勉強遅れて自分が損するというのが分からんかな。

私 : それはちょっと難しいよね。分かてるんだけれど、気持ち的には学校に足が向きにくいと。

美雄 : そんなに悪い奴らじゃないとは思ふんやけど、僕は人が嫌いやから。かまわれるとうとうしい。

私 : そうね。あんまり、かまわれるとうとうしいよね。
美雄 : うとうしい。僕は今、そういう感じじゃないときに、しつこくこられるのがめんどくさい。
母親 : そんなん、無視しといたら良いねん。無視できる歳やろ？そしたら、相手にせんようになるよ。
美雄 : ……無視できるんやったらしてるけど。できひんことは世の中にはたくさんあるやろ。クラスにおるんやから。
私 : そうね、クラスで過ごす時間、長いもんね。なかなかずっと無視してはいけないよね。かえって自分が居にくくなるものね。
美雄 : それに、そいつら、いじめようとかそんなんじゃないのも分かるし。単にからみただけ。
私 : あ…、そこに悪意を感じないのね？ 仲間って思ってるのかしら。
美雄 : 思ってるんちゃうかな……。でもうとうしい。
私 : 困ったね。どうしよう？
美雄 : 学校、行かんかったら解決する。

美雄君が語った学校に行けない直接的な理由は、しつこくからんでくるグループの存在であった。このグループは、美雄君によると、美雄君をいじめようとか、無視しようとかする性質のものではないのだが、とにかく「しつこくからんでくるのが嫌だ」というものであった。この件に関しても、母親は「僕は人が嫌いやから」という美雄君の発言を非常に気にして、「弟が障害を持っていることが何か美雄を人嫌いにしたのかもしれないね」と後に語り、その母親の思いが次の対話に繋がっていった。

〈場面3 人が嫌いな理由〉

私 : 人があんまり好きじゃないの？
美雄 : 好きじゃないっていうか、嫌い。怖い。
私 : 怖い……。なんでだろう。
美雄 : ……………
母親 : やっぱ、小さい頃から〇〇君(弟)の事で人からいろいろ言われたり、じろじろ見られたりしたからやと思いますね。私もいまだに人の目が気になりますから。それがトラウマになるんじゃないかと思います。この間、美雄と一緒にいろんな精神の症状見てたら、社会不安障害と似てるなあて。で、今日、お話お願いしたんです。
私 : なるほど……社会不安障害。自分でもそんな感じ？
美雄 : 症状は僕と似てる。
私 : ……そう。
美雄 : まあ、マイペースなんで。人と合わせるのは得意じゃないいうのはある。
母親 : なんか、やっぱり、いままでの積み重ねていうのがあるんでしょうね。しばらく、家でゆっくりさせてやりたい思いもしてきました。弟のことでは苦勞をかけてるのは分かってるから、ここは私が(将来のことが)不安ではあるけど、ゆっくりしなさいって言ってやらなくちゃいけないのもわかるから。
美雄 : ……………
私 : 弟さんに障害があるってこと、そのことでお母さん、ずいぶん気にされているけど、今の美雄

君はやっぱり、そういうことが気にかかっているのかしら。

美雄：それは今は「別に」かな。ゆっくりご飯食べれんかったりとか、テレビがゆっくり見れんかったりとか、めんどくさいこともいっぱいあって、喧嘩もするけど弟は弟やし。面白いところもあるし。弟は弟やから。

私：あ、可愛い？

美雄：嫌いじゃない。

母親：この子はいつも弟に優しく、私はいつもこの子に「ありがとう」「ごめんな」って言ってるんです。ずいぶんと我慢してることはあるだろうに、それを口には出さないで優しい子で、だから今になっていろいろ出てきてるんだらうと。もう、我慢せんで良いんやで。自分がしんどいときにはしんどいって言うて良いんやで。

美雄：だから、それは「別に」で言うてるやろ！

ここで、美雄君が若干、語気を荒げ、母親のいうことを否定していることが気になった。そのため、〈私〉自身が、全ての原因を「弟の障碍」に結び付けていく母親の枠組みをはずそうと(母親のもつドミナントなストーリーを転換しようと)試みたが、母親の枠組みをはずすことは難しく、〈私〉は、美雄君は弟に障碍があるという以上に、この母親の物語が美雄君に精神的な負担をかけているのだと再確認したのだ。この時点で、「語り(ナラティブ)の意味」の解釈はすでに、美雄君の「不登校」ではなく、「母親の傷つき」や「自責の念の強さ」に移っていったのかもしれない。最後に、母親とふたりで「語り(ナラティブ)」を振り返った場面を紹介する。

(場面4 母親と私の対話)

母親：やっぱり、弟のことが影響してるんですね。

私：そうですか？

母親：本人は優しい子やから、はっきりとは口に出しては言わないけど、私のせいだと思います。

私：でも、本人はクラスメートとの関わり方に悩みをもっているっておっしゃっていたんでは。

母親：それは、その悩みを解決できない根底にはいままで我慢してきて、私がかまってやらなかったことに対する抵抗なんだと思いました。

私：寂しかったっていうのは、なかったとは言えないでしょうが、お話を聴いていると、ずいぶんと楽しい家庭を作ってもらって、いろんな楽しい思い出もあったみたいですし、そればかりではないような。もっと、今に焦点をあてて、美雄君が困っていること具体的にひとつひとつ解決していったらいかがでしょう。

母親：困っているのは確かにクラスの子のことかもしれませんが、その背景には、やっぱり弟のことで傷ついていて、これはずっと一生、あの子が抱えていけなくちゃいけない苦しみでしょう？ 一生ですよ。……私はどうしたら良いのか、今になって、こんなことになって、もっと早くに言ってくれたら……。

私：何を……言ってくれたらと？

母親：僕も寂しいんや。僕も構ってほしかった。本当は弟が嫌いなんや。て。
私：弟さんのことを嫌いじゃないっておっしゃってましたよ。
母親：我慢してるんだと思うんです、今も。
私：お母さんは美雄君がそう思っていると思ってるんじゃないかと、そうは美雄君はおっしゃっていませんでしたよ。
母親：私にはわかるんです、母親ですから。ずっとあの子たちを育ててきて、やっぱりそう思われても仕方ないことしてきたなて。でも、障害のある子が出来て、手がかかることがいっぱい、どうしようもなかったです。
私：お母さんは頑張ってこられたし、美雄君はそのこと良くわかってらっしゃると思いますよ。お母さんがあんまり、そうおっしゃると、かえって辛いかもですよ。少し、問題を切り離して考えてみませんか。
母親：長い間かけて心にわだかまってきたことって、それがきつとその子の将来を決めていくんだと思いますから、切り離して考えて良いんじゃないでしょうか。
私：お母さんはそのときどきで一生懸命頑張ってこられたんですから、自信を持って、今の美雄君を励ましたり、叱ったりしながら今まで通り育てていかれたら良いように私には思われますから、今は、具体的に今のことをひとつずつやっつけていきましょう。しつこい子たちにどう「嫌だ」と言えるようになるかとか。
母親：……………

ここで取り上げた対話の中でも、〈私〉は『今』に焦点をあて具体的に考えましようとする母親にいいながらも、母親の問題と美雄君の問題を切り離して考えることが美雄君のためになると言及している。美雄君の不登校の原因の根っこに母親の考え方があると思っているからだろう。

こうして、〈私〉が「語り（ナラティブ）」をふりかえり切り取った4つの面接場面からは、中心的な語り手として存在しているのは母親であり、主たる相談者である美雄君が脇に追いやられているように見える。本来は、美雄君の問題と母親の問題をどこかで切り離してそれぞれに面接をするべきであった。しかし、構造上の限界から最後までふたつの課題を混在したまま面接は終了した。その中で、母親から自分自身の問題として相談されることも出てきた。面接中に母親から、美雄君は母親が私という「聴き手」を獲得したことを喜んでいと聞いた。その言葉を聞いた〈私〉は、美雄君がそれまで担っていた役割を渡す相手ができたことによって、ふたたび学校に戻るができるようになるだろうと感じていたのだ。

この面接において、〈私〉が気づかない〈私〉はどこにいたのだろうか。

5. 語りの場で生成した意味を解釈する〈私〉の存在

〈私〉は、語りの場で美雄君と母親の「語り(ナラティブ)」を聴き、そこに「母親自身の自責の念が美雄君に精神的な負担をかけている」という意味を受け取った。そのため、この面接をまとめるにあたっては美雄君の「不登校の問題」よりも「母親の物語」が優先され切り取られた。しかし、作成した逐語録を読んでくれた研究者仲間からの「どうして、『今』に焦点を当てるといいながら、お母さんの語りに引き寄せられたのか」という問いで、従来の「不登校の問題」に具体的に働きかけていこう、『今』に焦点を当てていこう」と方針を立てていたことと矛盾することに気づいたのだ。もちろん、美雄君が語る仲間との関係や「いじめ」の問題についても多くの時間を費やし、具体的な方法について考えていった。しかし、このまとめにはそれについては多くを記述してはいなかった。

従って、この外側からの視点がなければ、〈私〉が美雄君の「今」に具体的に関わっていくという面接の内容についての記述が薄く、母親が語った「傷つき」や「自責の念」に焦点を当てていることに気づけなかったのだ。つまり、本来、記述されなくてはならない「語り(ナラティブ)の意味」の生成に〈私〉が存在していたことに気づけなかったのである。もっといえば、美雄君の物語を母親の物語に引き寄せてしまったものが〈私〉である可能性もある。

本稿の1. 2. 3. においてナラティブ研究とは他者の「語り(ナラティブ)」に意味を付与していくのは、「語り手—聴き手」の共同作業であると述べた。つまり、他者の「語り(ナラティブ)」の意味生成には「聴き手」の関与が大きく影響しているということである。そのため、「聴き手」の側の研究もあらわれてきている。しかし、ここであげた事例から学んだことは、聴き手である〈私〉を分析に含有するだけではなく、外側の視点がなければ気づくことが難しい〈私〉の記述する試みもまたナラティブ研究の可能性を大きく拓いていくものだということである。これを簡潔に説明したものが図3である。

おわりに

ここであげたように、外側からの視点がなければ、私が美雄君自身の「今」ではなく「母親の語り(ナラティブ)」を重く取り上げたことに気づけなかったかもしれない。子どもの「不登校」の理由は複合的であると理論的に理解し、「母親原因説」を重くとりあげない私が、美雄君の不登校の原因を「母親の自責の念」に焦点化し意味をひろいあげていることに気づけなかったのである。それには、やはり当時の私がまだまだ子育て中の母親という役割をもち、そ

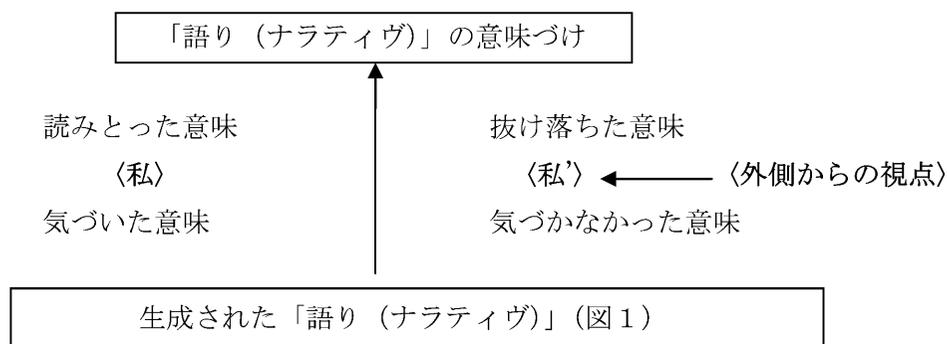


図3 生成された「語り（ナラティブ）」を意味づけする〈私〉と〈私〉

の母親役割が私自身の解釈の枠組みに大きく影響していたのだろう。外側からそれを指摘されてはじめて、聴き手の私がつもドミナントな物語が「母親」だった可能性に気づかされたのである。

他稿（山本 2012）で、障害をもつ人たちへの支援に関して私たち支援者が「知っているから気づかないこと」について論じたものがある。ここでは自閉症の方への職員たちの支援に関して、職員たちがもつ役割意識や専門性がドミナントな物語として、その個人の「当事者性」に深く入り込み、支援に錯誤を生じさせている可能性について述べた。この錯誤も施設の内側からのみみていたのではなかなか気づけないものであろう。スーパーバイザーや他の職員とのカンファレンスを通して気づいていくものである。

臨床的なカウンセリングでも、スーパーバイザーの存在がこの「外側からの視点」の役割を担うものとなるのだが、日常のなにげない対話の中でその存在を取り入れることは難しい。その中で私たちにできることといえば、〈私〉の解釈は唯一絶対のものではなく、多様な解釈があると自覚し、いろいろな人に意見を聴く、自分の視野をひろげておく、柔軟な態度を身につける、などを日頃から心がけておくことであろう。

さらに、現在の研究環境では、「語り（ナラティブ）」の意味の分析に他の研究者の意見を取り入れることにも限界があることも否めない。しかし、研究者が分析している「語り（ナラティブ）の意味」を広く理解するためにも、外側からの視点が入る協働な分析も視野に入れていかなければならない。なぜならば、極端なことをいえば、「語り手—聴き手」が協働で生成した「語り（ナラティブ）の意味」が、分析の段階で「聴き手の物語」になっている可能性さえも否定することはできないからだ。

ここまで論じてきて、私がかつて「語り(ナラティブ)」の意味を「語り手」とともに解釈しながらひとつの論文にまとめた経験があることを思い出した(山本 2008b)。その解釈の場で〈私〉から抜け落ちた〈私〉を拾い上げてくれたのが、「語り手」であったように思う。そのため、今後の語り研究において、面接の場だけではなく、後に「語り(ナラティブ)」の意味を振り返り考察する場にも、語り手が参加する意義も大きいと考えられる。

本稿では、「語り(ナラティブ)」の意味を大きく拓いていく〈私〉に気づかせる「外側の視点」の重要性について触れたのみであるが、次稿では同じ事例を用いて、「外側の視点」となってくれた仲間とその具体性について論じたいと考えている。

引用文献

- Anderson H., 1997, *Conversation, Language, and possibilities: A postmodern approach therapy*, Basic Books, New York. (=2001、野村直樹・青木義子・吉川 悟訳『会話・言語・そして可能性 コラボレイティブとは? セラピーとは?』、金剛出版)。
- Berger, PL. & Luckmann, T., 1966, *The Social Construction of Reality*, (=1977、山口節郎訳、『日常世界の構成』、新曜社)。
- Harre, R & van Langenhove, L., 1999, *Positoning Theory*, Oxford: Blackwell.
- 畑中千紘、2010、「語りの『聴き方』からみた聴き手の関与」、質的心理学研究第9号: 133-152。
- 広川律子、2003、『オレは世界で二番目か? 障害児のきょうだい・家族への支援』、クリエイツかもがわ。
- 星野晋、2006、「医療者と生活者の物語が会うところ」、江口重幸・斎藤清二・野村直樹編『ナラティブと医療』、金剛出版: 70-81。
- Kleinman, A. 1989, *The Illness Narratives, Suffering, Healing, and the Human Condition*, (=1996、江口重幸・五木田紳・上野豪志訳『病の語り—慢性の病をめぐる臨床人類学』、誠信書房)。
- 森岡正芳、2008、『ナラティブと心理療法』、金剛出版。
- 野口裕二、2005、『ナラティブの臨床社会学』、勁草書房。
- Sheila McNamee and Kenneth J. Gergen, 1992, *Therapy as Social Construction*, Sage Publication Ltd (=1997、野口裕二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー 社会構成主義

の実践』、金剛出版).

桜井厚、2002、『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』、せりか書房。

斎藤清二・岸本寛史、2003、『ナラティブ・ベースト・メディスンの実践 The Practice of Narrative Based Medicine』、金剛出版。

高井俊次・中西真知子編、2009、『語りと騙りの間 羅生門的現実と人間のレスポンシビリティ』、ナカニシヤ出版。

辻内琢也、2006、「民族セクター医療をめぐるナラティブ」、江口重幸・斎藤清二・野村直樹編『ナラティブと医療』、金剛出版：129-143。

山本智子、2008a、「『母と子の葛藤』を生み出す社会的状況について—思春期/青年期の子をもつ母親の語りを手がかりに—」、『奈良女子大学社会学論集』第15号：157-174。

—、2008b、「ある軽度知的障害をもつ人の語りと行為における変容のプロセス—コラボレィティブ・アプローチの視点からの再検討—」『臨床心理学』第8巻第6号。金剛出版：89-97。

—、2012、「当事者支援という錯誤—誰が誰を支援するのか」『発達132』、ミネルヴァ書房：76-83。